

大西洋上亡き妻の百ヶ日にあいて

―旧き女を偲びて新しき女に告ぐ―

(本多 静 六)
天 陽 学 人

(天陽学人とは某博士の匿名であります。世界旅行の途次、これを草して特に本誌に寄せられたものでございます。記者)

ああ洵に今宵は亡き妻が百ヶ日に当れり。予は今南阿の探検を了り、トリスタン島を経て南米に渡る途中、南緯三十六度の大西洋上タコマ丸甲板上に佇立し、遙かに北東の天を望んで在りし世の妻を偲ぶ。水天一色、大海原の北方低く懸れる月は清き彼女が眉にも似たり、見馴れぬ南十字星は奇しき碧光を中天に投じ、波影髣髴として彼女の霊や宿らん、懐旧の情は新愁の涙と共に尽きず、旅袵の濡るるは波浪の飛沫のみにあらじ。

白蓮女史を以て新しき女の代表とせば、吾妻は実に旧き女の典型なり。新しき女の生活は已に世人の熟知する所なれば、旧き女の生活振りを有りし俛に偲びて以て今日の所謂新しき女に反省を求めんとす。是れ予が新愁に対する切めてもの慰藉にして、又世の婦女子の爲めに他山の石たるを得んか。

妻は幼時よりキリスト教の神を信じたり、然れども亦日本婦道の三従の教を守れり。予に嫁してよりは、全然自己の人格を挙げて夫たる予の人格に投合し、自我を滅却して全く夫の生命に生き、夫の満足幸福を以て自己の満足幸福となし、夫の名譽功績を以て自己の名譽功績と心得、妻は夫を助けて成功せしむべきものにして、妻自らが出でて成功すべきものにあらず、且つ如何なる夫たりとも妻の努力によりては、成功せしめ得べきものなりと信じ、又妻は夫のために働きて倒れて後止むが本懐なりとの確信を有したりき。

予が妻の女学生時代には學術操行共に常に優秀にして、先の皇后陛下(昭憲皇太后)より光榮ある賞品等を賜りし事数回、後某軍医總監が日本の女子に対し専門医学を修め得る能力の有無を実験せんとし、其際特に選ばれたる二婦人の一人として、軍医の人々と共に医学を修め、遂に

開業試験にも合格したり。これが爲めに、予が最初の独逸留学中、妻は盛に活動して、医術開業の傍ら女学校、病院等にも兼務したるが、予の帰朝して官途に就くに及び、一家の妻としての道は自ら外に出でて働くべきに非ず、須らく内を治めて夫の爲めに内助の功を立つるにありとなし、一切の外出を謝絶し、専心一意子女の教養、家政の整理に努め、且つ毎夜子供を臥床せしめたる後は、予が勉強室に来て、予が助手としての役を勤めたり。当時予の職務は、帝国大学并に私立大学に数個の新講座を担任し、毎週二十余時間の講義の原稿を作り、傍ら講演論文の起草等多忙を極めたれば、其原稿の清書や英文の翻訳や、又は通信の代筆や、其等の仕事は全部妻の担任となり、連夜二時三時に至るも妻は嘗て何等不平不満、倦怠の色さえなく、常に嬉々として予が傍らに侍せり。

妻の家は以前何不足なき資産家なりしも、予等の結婚後間もなく関係銀行の破産に遭遇し急に無資産状態に陥り、予等自らが家運を再興せざるべからざるに至りたるも、妻は少しも悲観せず却て前途の幸福を確信しつつ努力せり。妻は予の修学せる財政経済学の原則を予の指示せる俛に多年忠実に実行し、家庭の生計は臨時用に供する貯蓄の末に至るまで一切を挙げて通常歳入(即ち予の俸給)のみを以て支持し、予が講演、著作、各種の顧問等より生ずる収入の如き、俸給以外の収入一切は、其額幾千に上るも一銭たりとも家計に流用せず、之を老後生活の資源として全部其元利を蓄積せり。されば予が満二十五年の勤続期に至るや、数ヶ所の土地家屋と幾万の財貨とを貯え得て、其利子のみによりて裕に一家の生計を立て得るに至りたれば、妻は吾が家の幸福を感謝して曰く「此上一身一家の爲めにのみ計るは男子の執るべき道に非ず、願わくば進んで社会国家の爲め、延いて世界人道の爲めに貢献せられよ」と。蓋し妻の志は修身齐家を第一とし、次で治国平天下に至るにありて、予等生活の初めの二十五年間即ち予が満五十歳までを、主として吾家の爲めに働く時期とし、以後は即ち社会国家の爲めに尽さしめんとするにありたり。

平素妻は家庭内の事と親族間の事とは総べて自分一人にて切り盛りし、喜ばしき事柄の外は一切予の耳に入れずして毫も内顧の煩いなからしめ、又毎年一回大晦日に、其年の家計決算を報告し、且来年度予算の大意に



本多 銚子

大正5年(1916)

予に対する妻の態度は極めて従順にして、偶々予の意見の正しからざることあるも、笑顔を以て之を正し、猶お若し予が聴かざる場合にも別に敢て争わず、退いて私かに神に祈るのみなれば、予も遂に其優しき心立に感じて、持前の強情我儘を撤回するが常なりき。

彼女の身体は肥大なりしも心は極めて無邪気なりし。一例を言えば、予は外出する毎に玄関にて、彼女とニラメックラをなすことを忘れず、是れは予て吾等夫婦の間には如何なる場合にも互に笑うて

就て予の承認を受くる時、別に貯えたる一万以上の貯金帳を取り出し、これは一家の経済以外のもの即ち夫君の活動費なりとて予に提供し、予をして常に金銭上に顧慮する要なく、思ふ俛に活動せしめたりき。

曾て遠く海外に旅行せんとせし際、予は妻に向い『御身は留守に淋しからずや、心配はなきか』と問えば、留守居は妻の役目、殊に自分は神様と共に留守する心であれば何等の心配なし。又万々一如何なる不幸ありとも、一家を支え子女を教養するには自分の医業によりて十分なれば、余分の事は一切考えずに偏に男らしき成功に志すべしと云うのみにして、未だ嘗て一片の不安の影さえ予が念頭に起さしめざりき。

顧れば予が生来何等天稟の才能なくして海外に航する事十七回、足跡五大洲に遍く、而して東西最高の学位を領し、勲位文臣の上班に進み、且つ不完全ながら一百数十冊の書を世に著し得たるもの、偏に是れ亡妻が内助の功に帰せざるべからず。

妻は誠に心立優しき女にして、他人の薄幸を見ては、自分の着物を脱ぎてまでも助けてしかも恩とせず、私かに其善をなし得たるを感謝するを常とし、謙讓にして決して己れの長を誇らず、又絶対他人の短を語らず、毎日朝早くより女中と共に働きたれば、多年出入せる人々にてもその学才を知るもの少く、其医者たることさえ死後初めて知りし人さえ多かりき。

別れんと約したるが、自ら此習慣を作したるものにして、彼の最後の日の朝の如きも、例の如く玄関にてニラメックラせる滑稽なる妻の笑顔こそ、今や実に今生の思出多きカタミなれ。其朝は別けて予も妻も共に大に笑い、女中までも大に笑いたる程無邪気なりき。又妻は夫婦の間にて議論を以て事を決するは、互の心に不快を残す基なればとて、相談の上一種の憲法を定めたり。即ち互に二度までは自己の意見を主張し得るも、猶お、決する能わざる時は、三度目は議論無用一切ジャンケンポンにて決する規定なり。由来利害得失の判然たる事には別に議論の余地なきものにて、其余地ある場合は大抵五十歩百歩の差か、又は何れにしてもよき事なるも、只行懸りの感情よりいがみ合うに過ぎざるものなれば、ジャンケンにて決する時は勝つも負けるも互に笑いて落着し、常に家庭の円満を期し得たり。可笑しきは、妻は常に石を出す癖あり、予はいつも紙を出して勝を占めたりしが、晩年小利口なる小女が妻に忠勤振りて鉄を出させ、為めに予は、晴天に洋傘を携えさせられ、又炎天に外套を担わされたることもありたり。

妻は深き信仰の外別に趣味もなく、ただ家政を治めて予の成功を唯一の楽しみとせるが如きも、されど花の晨には好める今様……君を初めて見し時は千代も経ぬらん姫子松云々と吟じ出で、宛も予に初めて見えし当時の喜びを祝福するが如く、月の夕には予に麦酒の盃を捧げて、八雲琴を弾づるの清興を忘れず。

妻の性質右の如くなれば、予等が三十余年間の生活に五人の子供と一人の孫を見て家庭の繁栄を来せし外、夫婦の間には何等の不快なる出来事なく、又現代流行の自由論や人格論の必要もなければ問題も起らず、始終満足と感謝との生活を持続し、特に妻の晩年には自己の死に対してさえも感謝し得るに至れり。曰く『自分は永年の間不束なる身を以て自分の望み通り立派(?)なる夫の愛に生き、自分の踏むべき道を辿りたれば、最早神の思召により何時この世を去るとも何一つ遺憾なし。時至らば願わくば心おきなく楽に天国にゆかん』と。果して妻は望みの如く、其日も快く家族と夕飯を喫しつつ、其儘急に倒れて、平常入浴後の睡眠と異らざる嬉し相な熟睡状態を以て安らかに天国に逝けり。



竹内茂代（旧姓井出茂代）結婚式の記念写真 大正5年（1916）
（竹内茂代は銚子の後輩女医で、本多家のかかりつけ医でもあった。
前列右から2番目が銚子、左から2番目が静六）

は、生前其希望によりて、老後静かなる田園生活に入らんがために、地を天城山南の景勝の境に相し、其処に広き山と清き温泉を購いて、加茂山荘と名づけたりしも、未だ一回だも妻を山荘に伴う能わざりし事なり。ああ妻の為に植え妻の為に培いたる、其無花果やオレンジは、年々花咲き実るべきも、妻は最早長えに訪うことなかるべし。

予は茲に面はゆき次第なれど、旧き女の結婚前後の経緯に就て少しく語らん。妻の両親は彼の女を掌中の珠と慈み、漸く学業を卒えたる其愛する一人娘の為に良き婿を迎えんと、捜しに捜して遂に大学の某教授にまでも之を依頼するに至り、其教授は当時首席学生たりし予を選びて先方へ推薦せんとしたる訳なれど、予は未だ無邪気なる学生として何等結婚などの考えなかりしかば、自分は固よりどうでもよきも、親許に相談せざる内は何とも確答し難しとて、体よく謝絶せしつもりにて、伊豆の国指して実地演習に旅立ちたり。然るに一方彼女は折角両親の選び呉れたる夫に添うこと能わざるならば、寧ろ生涯独身にて暮すべしとむづかり出し、両親も困じ果てしが、漸く彼女の父は一策を案じ、わざわざ予

妻は元来人並勝れし健康体なりしも、余りに勤勉努力したりし結果にや、十四年前慢性腎臓病を発し、其回復の望みなしと知りたる予は、切めて妻の生ある間に、予の全力を尽して精神的にも肉体的にも妻をして絶対に安静と満足とを得せしむべく努めたり。其効ありてや某医学博士が三年か七年なりと診断されたる妻の寿命が、案外にも満十四年間を保ちたるなれば、予は其死に對し何等心苦しさを覚えざるも、唯一つ心残りなる

の故郷に旅行して一面識もなき予の生家に泊り込み、母や兄に直談判に及びたるも、未だ予の意思の有る所を知らざることなれば返事に困り、是れ亦体好く謝絶の意味にて、結局如何ようとも本人の意思に任すべしと挨拶したりしかば、彼女の父は然らば生家に於てさえ異存なければ本人は已に承知の上なりとて殆ど独り極めに取極め、改めて予に確答を促すこと急なり。而して彼女も亦両親の許しを得たりとて予が旅先に宛て、水茎の跡美わしき手紙を送り来れり。豊麗なる文藻に綿々たる情思を伝え、其誠意は炷き籠められたる名香の匂いよりも濃やかなるものありき。道理なる哉、其文は歌道の師と仰がれし彼女の父の添削にかかり、其書は彼女が幾度か其名譽を荷える御前揮毫の折のつもりにて斎戒沐浴、一心をこめて認めたりしものなること、後に至りて知りたり。兎にも角にもかかる熱切なる彼女の文に接することの度重なるに伴れては、流石の木強漢たる予も何時しか心融けて懐しきを覚え、遂に彼女との婚約を肯諾するに至りしなり。

今彼女の文中より記憶せる短歌の一二を拏ぐれば

幾度か 思ひいづ山 天城山 思ひあまりて 君を待つかな

又其次便の文の終りに

庭の梅に つたふ鶯 もろともに ないて待つなり 君が帰るさ

彼女は出入常に侍女を伴うが如き旧式なる両親の手許に育てられたる結果、何等結婚に関する知識なかりしかば、当初は種々の困難を見たるも、為めに却て互の純潔を保証し、互に信じ相愛するの動機とはなれり。今の所謂新しき女性達は、夙くより此等結婚上の知識を有し、甚しきは其予備練習さえなす者もありと聞く。是れ果して幸福なる結婚生活を完成するの道なるか。

思うに亡妻は予に嫁するや、先づ自己の自由と人格とを滅却して、却て大にこれを得たるのみならず、遂に夫たる予をも亦其全家庭をも自己

の自由範疇に収め、自己の人格と同化せしめて、満足感謝の結婚生活を遂げたるものなり。故に予は此機会に於て敢て世の女性に告げん。凡そ男子は片意地なるものにして、妻がその総てを夫に捧げて自我を滅却したる場合に臨めば、夫は却て妻の自由と人格とを認めんとするものなるも、若し妻にして其自由と人格との尊重を、妻が当然の権利として之を要求するに於ては、夫は却て之に反抗の念を萌し、其自由を束縛し、其人格を無視せんとするの行動に出づるものなれば、人の妻として真に其自由と人格とを有する幸福なる生活を求めんとせば、是非とも旧き女とならざるべからざる事を告げんとす。若し夫れ自己当然の権利を抛擲し、夫の思召に縋りて漸く領得する如き自由と人格とは敢て之を欲せずと云うが如き思想を有する女は、仮令如何に善良なる夫に嫁するも又幾度其夫を取り換えて見るも、到底結婚生活の幸福を完うする能わざるもの、寧ろ退いて生涯結婚せざることこそ却て本人の爲め又世の男子の爲めなる事を断言せんとなす。

亡妻生前に於て其持病の不治を知り余り余命長からざるを悟るや、徐に後事を処理し、特に予に対しては深く自己の幸福を感謝し、自分の死後は決して嘆かるることなく、直ちに良き後妻を迎えて幸福に暮すよう遺言したりき。されば妻の死後早くも後妻問題を持ち出したる者あるも、予は愛妻を亡いたる新愁切りにして、予て期したる事ながら傷心日と共に深く、到底斯る問題に触るるの気になれざればとて、一切これを謝絶したるも、家に在りて朝夕亡き妻の忘れがたみを見るにつけ、時としては妻の跡を追いたき心地さえ覚えて悲しきこと限りなければ、予は一刻も早く此等の苦痛より遁れんと欲し、兼ねては生前に於ける妻との約束なる、予が是迄の海外旅行に於て見残せる南阿及び南米の旅行より、序に曾遊の欧山米水をも巡りて旧情を温めんが爲めに、妻が墳墓の土未だ乾かざるに先ち、行李を急ぎて周遊の途に上りし次第なり。

旅程は早くも北緯三十五度より南緯三十七度に亘り、方に六千余里の山河を後にし、已に春と夏とを送りて今や坐る淋しき南阿の秋を船窓に眺むるに至りたるも、亡き妻の上のみは夢寐の間にも忘れ難く、月影に花香に其悌の偲ばれて、珍らしき異郷の果物さえ味いなく、好める一杯

の麦酒さえ亡き妻の回向にもとて之を禁じれば、転た食欲も衰えて、体量も十七貫余に減じ、且つ船中若き人々の賑やかに笑い戯むる社交さえも物憂くなり、孤り淋しき船端の甲板に踞して深き思いに耽る事のみ多くなりぬ。されどされど、斯くして此上猶お鬱々たる日が続くるに於ては、仮令自ら海に投ずるの物狂わしさはなくとも、自然に妻の跡を追う事になりて、亡妻の切なる遺言の趣旨にも背くべく、又世に尽すべき責任ある男子の道にも非ざるべければ、想い出づる綿々の情緒は妻の百ヶ日に当れる今宵を限りとして断ち切り、明日よりは決して妻の事を思わざるべし。否々、到底予には心の底より妻を忘れ去る事能わざるべきも、切めて明日よりは妻が理想なる無邪気にして若々しく快活にして男らしき生活に入り、以て亡妻の遺志を継ぎて大に世に貢献する所あるべきなり。

舒し来りて観ずれば旧き女の生活振りが現代の所謂新しき女の結婚生活に比して、果して何れが幸福なるべきか。又世の男子は其新旧何れの女性を求めんとするか。真に重要な問題なりとなす。予は敢て言う。今日の婦人が滔々として所謂新しき思潮に走り、何処までも無理解なる個性の自由と、無反省なる人格の独立とを欲求するに於ては、寧ろ彼等に背を向けて長く孤独生活を営むに加かざるを思う。然り誰か又二代目伝右衛門君たるを忍ぶべきやと。

大正十一年四月三日、希望峰を西南に距たる二千

湮の海上に於て涙と共に記す。

〔婦人の友〕第十六卷第八号、大正十一年八月号所収）

※ 資料の翻刻にあたり歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めました。また、漢字の読み仮名を必要最低限としました。